

【IV】 咲き誇る木の花

春は万物が繁殖するときである。植物も動物も生命の限りを尽くして、花を咲かせて子供を育てる。あらゆる生きものは子孫を残すために生存し、あらゆる生物の習性は子孫を残すことと密接に関わっている。たとえば夏になると川原にチョウチョが吸水に集まっているのをよく見かける。しかしこれは水をのみに来ているわけではない。下等動物には体温の調節機能がついてない。気温が40度になったら体温も40度である。そこで体温を下げるために、こうして吸水するのである。だから吸い込んだ水は、そのままお尻から排出している。ところがここに集まってくるのは、実は雄だけで雌がやってくることはほとんどない。

はて、なぜだろうか？

動物の精子は低温には極めて強く、零下では何年も貯蔵できることはよく知られている。逆に高温には極めて弱い。高等動物では雄の睾丸は体外にあって、これで温度調節をすることができる。しかも人間のようにラジエター効果を持った構造になっているものも多い。しかし下等動物にはそんな物はない。もっぱら水冷式に頼るより方法はないのである。それで雄だけが生殖機能を失わないように川原に下りて体温を冷やしているというわけである。

我々人間にもそんな子孫繁栄の知恵をみることができる。たとえば人間のあらゆる臓器の中で、最後に息をひきとるのは子宮である。臨月の母親が交通事故などで亡くなっても、子供だけ助かることがあるのはこのためである。子孫を残すために生きものは、あらゆる努力を惜しむことなく注ぎ込んでいるといえよう。

植物も同じである。自分の生存が危うくなると花を着けて子孫を残そうとする。たとえば竹の仲間は枯れる前にたった一度だけ花を咲かせて種子を残す。多くの植物は盛夏の日照りに耐えて、枯死寸前のところで花芽を着ける。ここにも枯死するまえに子孫を残そうという摂理が働いている。花はいわば植物の生殖器であって、生命の証でもある。そして春は、生きようとする大自然の姿そのものなのである。

※花弁と萼＝ともに花を構成する要素で、雌蕊や雄蕊など、生殖に重要な役割を果たす器官を保護する一方、花弁は動物や昆虫などを引き寄せる働きもしている。専門的には花弁の一枚一枚を花被片、花弁の集まった花全体を花冠ということもある。また萼は花冠や実った果実を支える働きもしており、一枚一枚を萼片ともいう。萼と花弁を合わせて花被ということもあり、花冠を内花被、萼を外花被ともいう。植物の花や葉の構造や名称等に関しては植物の用語集図説をご覧ください。



春の花木がいつせいに咲き誇る(福島県花見山公園)。

この項に記されている植物リスト

【IV】 咲き誇る木の花

01-04-00-1

- | | |
|--------------------------------|------------|
| 1) ロウバイ=蠟梅 | 01-04-01-1 |
| 2) マンサクとトキワマンサク=万作と常葉万作 | 01-04-02-1 |
| 3) トサミズキとヒュウガミズキ=土佐水木と日向水木 | 01-04-03-1 |
| 4) サンシュユとゴシュユ=山茱萸と呉茱萸 | 01-04-04-1 |
| 5) ボケ=木瓜 | 01-04-05-1 |
| 6) ジンチョウゲ=沈丁花 | 01-04-06-1 |
| 7) ミツマタ=三桠 | 01-04-07-1 |
| 8) コブシ=辛夷 | 01-04-08-1 |
| 9) モクレン=木蓮 | 01-04-09-1 |
| 10) レンギョウ=連翹 | 01-04-10-1 |
| 11) ライラック | 01-04-11-1 |
| 12) ボタン=牡丹 | 01-04-12-1 |
| 13) コデマリとユキヤナギとシヅメバチ=小手毬と雪柳と蜆花 | 01-04-13-1 |
| 14) サンザシ=山査子=山樗子=メイフラワー | 01-04-14-1 |
| 15) アメリカハナミズキとヤマボウシ=花水木と山帽子 | 01-04-15-1 |

目次に戻る
